

氣が遠くなつた。

逦査が來た。

しつかりしろと言ふ。

外に出ると日が暮れてゐた。

僕は江戸川の終點まで歩いて、其處の帳場の車夫に、田端までやつてくれと言つた。

老人の車夫が僕をのせて、幌を掛けて橋を渡つて音羽の坂にさしかゝる。

公園の便所に寸時寄つた。

車夫が梶棒を上げて二三間曳き出すと、僕は何かの評子に唸つたのだ。

すると車の函が逆さまにひっくり返つて、僕の頭が地べたについた。

兩足はさかとんぼに上になつてゐる。

やつたなと思つてゐると、手放した梶棒を車夫が再び握つて引き下げたので、僕の體は元の位

置に復した。

「旦那俄負はありませんでしたか」